

## 島原城

1616年、江戸幕府は大和国を治めていた松倉重政（1574–1630）に、武功をあげた褒美として島原地域を与えました。島原は1612年に大名有馬晴信が死亡するまでキリスト教信仰が盛んでした。1614年にキリスト教を禁止した将軍徳川秀忠は、晴信の息子よりも積極的にこの地域のキリシタンを取り締まれる人物を求めていました。

この地の領主となった松倉重政の最優先事項は、立派な城を築くことでした。民衆に増税や建設作業を課すことにより、重政は島原藩の4万石（20万ブッシェル）という決して多くない禄高に対して不相応なほど大きな城を手に入れました。7年をかけて築いた城が1625年に落成すると、重政にはもはや躊躇する理由は何もありませんでした。領内のキリシタンを迫害し始めた重政は、彼らを雲仙に湧く熱湯の温泉で生きたまま茹でた後、信仰を捨てるまで拷問しました。

重政の息子 松倉勝家（1598–1638）は、1630年に島原藩を受け継ぎました。不作が続く農民たちの状況が悪化する中、勝家は父親が行った過酷な徴税と残忍な刑罰を続けました。苦難に耐えきれなくなった領民が起こしたのが島原の乱（1637–1638）でした。大規模に築かれた城にも助けられ、幕府側の軍勢は十分に武装し統制のとれた島原の反乱軍による攻撃に耐え抜き、最終的に反乱軍は撤退しました。しかし、勝家は長くは生き延びませんでした。松倉勝家は1638年に処刑され、その後、島原城の大名は何度か入れ替わりました。

島原城は、明治政府が1873年に発布した廃城令により取り壊されました。現在の建物は、実は1964年に鉄筋コンクリート造りで復元されたものです。城内には史料館があり、その2階にはキリスト教関連の資料が展示されています。数枚の英語のパネルには、島原のキリシタンの歴史が英語で詳しく説明されています。展示物には、キリスト教の絵像を踏ませる「踏み絵」の実施方法が書かれた役人向けの手引書や、踏み絵に使われた絵板、島原の住民が踏み絵を済ませたことを示すために署名した台帳などがあります。

3階には松平家の武具が展示されています。また、海と山の景色に加え、城の櫓や城壁、堀などを一望できる屋上にもぜひ足を運んでください。